
夜空に散る炎花(ラガルト × イサドラ)

風の紋章

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空に散る炎花（ラガルト×イサドラ）

【Nコード】

N1889B

【作者名】

風の紋章

【あらすじ】

ラガイサSS。イサドラは、外見は、ラガルトの思い出の人アイシャに似ていたと思います。

エリウツド軍は村に入った。

するとお祭りなのか村人達が随分と賑やかに、楽しそうに騒いでいる。

その楽しそうな雰囲気につられたのか、軍にいる女性陣はにこにこしながら遊びに出かけていた。

ラガルトはのんびりと店を見て回っていた。その時である。

「うわあああん！！」

近くで子どものものすごい泣き声がした。

「お母さーん！お母さーん！！ヒック、グスツ・・・」

「やれやれ迷子か」

ラガルトはしゃがんで、子供を目線を同じにする。

「うーん・・・どうすりゃいいんだ？」

怯えさせないよう、なるべく穏やかにこの辺の子か？とか母親はどうした？

と声をかけてみるのだが、子供は大声で泣く事は止めているものの、まだシクシクとしゃくりあげている。

ラガルトは考える。

放っておいてもいいが人買いに捕まったりでもしたら気分が悪い。

もしも捨て子ならば近くの孤児院にでも預けにいくかと考えがまとまった。

「ホラホラボーズ、泣くんじゃないよ。」

子供の目の前でパツと手を開く。と、そこには花が一本。

あれだけ泣いていた子供がピタツと泣き止むと、

きょとんとしてラガルトを見つめた。

「すごい！おじさん、今どうやったの？」

子供が目をきらきらさせて見てくる。

「うつ・・・。」

おじさんと言っ言葉と、

先ほどまであれほど泣いていた子供がもう泣き止んだのに心の中で苦笑する。

「まあいい、気に入ったか？」

もう一度同じ手品を披露してやると子供は更にきゃっきゃと喜んだ。

「落ち着いたか？ボーズ。お前、母親は？」

「分からない・・・一緒に祭りに来て途中ではぐれたの・・・。」

不安そうな目でラガルトを見つめてくる。

「僕・・・もうお母さんに会えないのかな・・・」

お母さん僕の事嫌いになったのかな・・・？」

また泣きそうになる子供を見てラガルトは慌てて宥める。

「大丈夫だって、お前ただの迷子だろ？こうしてやるから。」

「わっ。」

そこへイサドラが通りかかった。

（あれは・・・ラガルト殿？何をして・・・！）

「ほくら、しっかりママを呼べよ。」

「お母ちゃん！！」

イサドラの視線の先には、子供を肩車しているラガルトの姿。

「坊や！」

間も無く一人の女がラガルトの元へ駆け寄ってきた。

「おお、ありがとうございます、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

母親は子供に頭を下げさせると、

自身もラガルトに何度も頭を下げ、去っていった。

「はは・・・。」

苦笑していると、不意に背後からパチパチと軽く手を叩く音がした。

「おー、騎士様。」

「イサドラです。」

「失礼、イサドラさん。どうしてこんなところに？」

「いえ、子供の泣き声がしたものですから。」

「へえ？あんたも祭りを楽しみに来たのかと思ったよ。」

「からかうようなラガルトの問いにイサドラは微笑む。」

「いえ、生憎先ほどまで武器を修理していたのです。」

と答えるのだった。イサドラが更に穏やかな表情で話しかけてくる。

「子供が・・・好きですか？」

「まー嫌いじゃないがね。最近物騒だしな。」

人攫いに攫われたとなりや後味悪いだろ？また迷わなけりやいいんだがね。」

「お優しいんですね。」

「は？」

「本当に、この前からイメージを崩され通しです。」

あ、ラガルト殿。先ほどの手品は見事でした。

貴方にそのような特技があったとは」

「ははは、見られてたか。」

「私も幼い頃手品を見た覚えがあります。」

とても・・・ドキドキして楽しかったのです。」

「あゝその・・・騎士様は何だ、花が好きかい？」

「花ですか？ええ・・・はい・・・。」

ラガルトはもう一度、子供にしたのと同じ事をした。

そして、イサドラに半ば強引に花を渡す。

「じゃ、俺はこれで。」

「ラ、ラガルト殿！？ラガルト殿・・・。」

イサドラの手の中には可憐な花が一輪あった。

イサドラはふうつとため息をつくと、

しばらくの間、微笑を浮かべながら星の瞬いている空を見つめていた。

その手の中にある花を愛でながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889b/>

夜空に散る炎花(ラガルト×イサドラ)

2010年10月9日08時01分発行